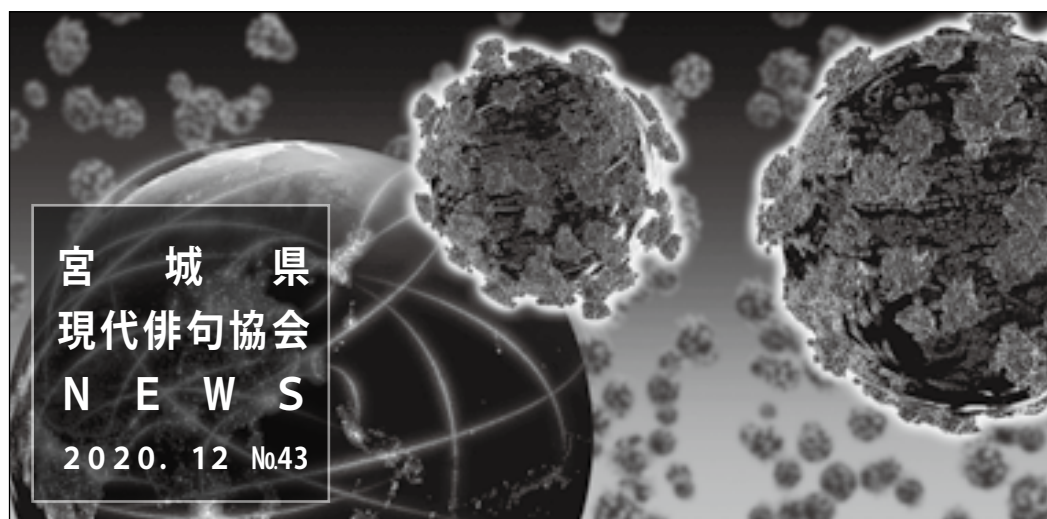




宮 城 県
現代俳句協会
N E W S
2020. 12 No.43



はばたけ子どもたち

日下 節子
(小熊座)

桁はずれの残暑を乗り越えほっと息つく爽やかなある日、新聞紙上で、「無主物」という聞き慣れない言葉に出合った。広辞苑を繙くと、法律用語で何人の所有にも属さない物とあった。震災後九年七ヶ月となった今、この無主物をめぐる論争が絶えないという。自然界の有する草木、鳥や魚すべて無主物であり、驚いたことに放射線のセシウムもまた無主物であるとのことだった。ゴルフ場の除染も然り、所有物の除染に責任はないとの論争に、法律に疎いながらも奇妙な印象を拭えない。フクシマを苦しめたセシウムも、この世界に蔓延る新型コロナウイルスも、共に目に見えない恐怖の魔物であることに変わりない。なぜか同じであることが恐ろしい。今や全世界で三千四百万人超え、国内でも八万五千人を超す感染者の膨大な数に、人間は自粛を強いられ、やがて人間性が毀れてしまう危機感を抱いてしまう。

このようなコロナ禍の中、夏休みの活動の一つとして、大河原小中学校「子ども文芸展」の選考委員会があった。

我町は俳句の山家竹石、短歌の佐藤佐太郎、川柳の葛作太郎と至高の文化人を輩出している。未来を担う子ども達に先人の偉業を伝え継ぐと共に、伝統的な文化に触れて感受性を高めるべく、大河原町文化協会と公民館が一体となつての毎年の企画である。

今年はコロナ禍の臨時休校の埋め合わせで、夏休みが短縮されたのにも拘わらず、三百句の元氣溢れる投句に感激だった。私は俳句部門四人の選者の一人として選に当たったが、小学四年生の「花壇からぼくを見ているかたつむり」、小学六年生の「雨あがり光って見えた夏の空」、中学二年生の「ぼくにだけ動いて見える夏の星」などの純真無垢な作品の数々と、自然界を見る子ども達の目線と感性に拍手を贈りたい思いだった。

自粛する外にない閉塞感の中にあつて、消息の見えないウイルスに嘖まされている時こそ俳句を詠んで、五七五の世界を大切にしたいと思う。

新型コロナウイルスの時代と俳句

石母田星人
(滝)

「シュウソク」には「終息」と「収束」がある。完全制圧が「終息」、ほぼ事態が収まるのは「収束」だ。新型コロナウイルスの場合、世界中から感染者がいなくなる「終息」は恐らく無理。「収束」を目指すということになる。今までの枠組みはもはや成立しない。コロナと共に生きることが前提に切り替えが必要だ。

そんな切り替えが進む昨今、俳壇と歌壇が並ぶ新聞や雑誌などを広げてみると、新型コロナウイルスをはじめ社会現象を詠んだ作品が多く載るのは歌壇の方だとすぐに分かる。なぜ俳句にはそんな作品が少ないのか。さまたまあるだろうが、俳句形式にもその要因がある。

富澤赤黄男は「詩は〈完成〉を希^{ねが}いながら、しかも、みずから〈完成〉を拒否しつづける——この根源的な矛盾が、われわれを詩におもむかしめる」（「クロノスの舌」）と書く。短歌の「五七五七七」から「七七」が取り払われたかたちの俳句は、宿命的に未完成だという。俳句

は本質的に未完成をはらんだまま完成した形式だというのが、

短歌は大変自由で、唯一の制約は五句三十一音の定型。それに比べて、制約が多く短い俳句は多くのことや思いを表現できにくい。だから、作者の主観的な感情や思想は言葉の裏側にそっと畳んでおく。短歌はリアルに核心を突き、俳句は見えないものを見えることで七七の足りない部分を補う。主観や思いは隠すことで見せるという格好だ。

そんな背景から一般的に言われている俳句は、感情や主観的な思いを極力抑え、心に触れた物に代弁させ、語らせるといふ形の抒情詩ということになる。積極的に語らずに、言いたいことを物に語ってもらい、読者に言葉の裏側を読んでもらってこそ完成する形式だ。

短歌と違って、コロナ禍など社会現象を反射的に詠んでも作品になりにくいのは、この宿命的未完成に根っこがあるからだと考えられる。

そうは言ってもわれわれは、俳句形式にいちいち疑問を持つことなどはなく、日々、生きている今という個人的時間に重層させて、時代の空気や社会の現象に反応した俳句を作り続けている。リアルに核心をつけない宿命だが、作句という行為は時代を写す鏡に違いない。そんな俳句の難しさの中にあっても、現状から意識を遠ざけることなく、遭遇した経験を懐深く沈潜させ含蓄させて詠んでいきたいものだ。

翻車魚の尾鰭の通る夏木立

星人

新型コロナウイルスの蔓延する今を詠む

帰るなど告げる試練や盆の月

佐藤 詠子（海原）

造物主あり芋虫もウイルスも

小野 豊（小熊座）

未来図はすべて白紙に夏落葉

佐藤 成之（小熊座）

身に入むやコロナマスクの物干場

伊澤二三子（小熊座）

約束の日にち決まらぬ秋桜

関根 かな（小熊座）

自粛とは船旅に似し梅雨の月

土屋 遊蛭（小熊座）

語れないコロナと語る無月かな

杉山 一朗（小熊座）

囀や校庭に子ら誰もいず

大坂 宏子（小熊座）

地球ごとマスクに覆う夏の夢

渡辺誠一郎（小熊座）

放課後はカヌー部員の川となり

鈴木ヨシ子（きたごち）

検温で始まる講義文化の日

菊地 幸子（無所属）

コロナ来てこの夏空の底抜ける

中村 考史（海原）

三密の夏と一緒の熱中症

佐藤 みね（小熊座）

青嵐わたしも地球いじめたの

中鉢 陽子（小熊座）

コロナ禍の世界地図見る残暑の間

宮崎 哲（小熊座）

ゆく夏や自粛の間をミシン踏む

佐々木和子（無所属）

マスク手洗い3密避ける残暑かな

菅原 俊夫

帰省自粛の子らを思へば鰯雲

伊澤 哲雄（小熊座）

人類にウイルス我に秋刀魚鰻

高橋 彩子（小熊座）

眼で測る人との間合ひ梅雨の街

稲村 茂樹（陸）

コロナ禍の真つ赤な地球半夏生

星 節子（無所属）

梅雨冷や駅のベンチも一人おき

菊池 修市（青岬・牧）

コロナパンデミックサンファン号が火達磨に

八島 岳洋（小熊座）

コロナ禍の山河を暑中見舞い来る

土見敬志郎（小熊座）

自粛あゝ忘れ霜さえ詩を抱き

狩野 康子（海原）

秋夜覚めまだ見ぬコロナ恐れけり

島田 静子（無所属）

疫病はどこ吹く風と竹の春

今野 勝正（波）

遠雷や言葉は封鎖されぬもの

平山 北舟（小熊座）

梅干と味噌汁で凌ぐコロナ禍を

紺野みつえ（小熊座）

呼吸して無月に菌は増殖す

小田桐妙女（陸）

九穴よりコロナウイルス田水引く

坂下 遊馬（小熊座）

新涼や囲炉裏の灰の薄明り

吉沢 美香（小熊座）

濡れそぼつあぢさゐ活けて家籠り

新藤 綾子（青岬）

コロナ禍の塞翁が馬自肅中

後藤九尼克（野の会）

朝顔や支柱の先は濁世なる

丸山みづほ（小熊座）

テレワークの背を見守る金魚かな

倉基七三也（滝）

目に見えぬ魔物に怯え震るや

郡山や糸子（小熊座）

朝顔のさかりコロナ禍制すがに

大久保和子（小熊座）

川霧の湧き来る朝疫病濃し

鈴木 純子（小熊座）

隠栖と気どるほかなし花の昼

浪山 克彦（小熊座）

コロナ禍や桜葉降る通学路

高橋きみゑ（青岬）

コロナ禍は知らぬ存ぜぬ葱坊主

鈴木八洲彦（波）

青簾子のテレワークに秘書ごこち

小関 桂子（青岬）

コロナ禍の地蔵のマスク昼ちちろ

鈴木 弘子（滝）

ウイルスに銃口向けし鉄砲百合

梅森 翔（滝）

向日葵の葉の稠密コロナ貌

小倉 協三（姫沙羅）

コロナ死は遺骨待つのみ花の雨

仙 とよえ（新俳句人連盟）

コロナ禍の死者の出る星天の川

丸山千代子（小熊座）

コロナウイルス蔓延る世なり鳥雲に

鈴木 三山（滝）

卯の花腐し力士四股踏む無観客

浅沼真規子（陸）

かくんと膝や疫病の二百十日

武山 平（青岬・群青）

沈み込む金魚あなたに会ひたくて

小田島 渚（鰻・小熊座）

自肅して五感研いでる法師蟬

薦 とく子（海原）

不条理の底より仰ぐ初夏の空

小村 寿子（陸・仙臺書院会）

はたた神コロナ疫病のもと叩け

水戸 勇喜（小熊座）

二百十日のドアノブを拭きに来る

庄子 紅子（牧・青岬）

コロナ禍で人來ず除草剤撒布

小松 雅朗（ロマネコンティ）

人集る街にウイルス牛に虻

千葉 勝（きたごち）

かはほりのこゑや第二波第三波

八島 敏（滝）

禍の被膜にしみる晩夏光

泉 陽太郎（海原）

ウイルスは生没未詳ひつじ草

佐野 久乃（小熊座）

藪枯らしこの土手の風知り尽くす

永野 シン（小熊座）

葦汁やTVに世界地図真つ赤

成田 一子（滝）

コロナ禍の世を真二つに黒揚羽

嶺岸さとし（海原・青岬）

マスクせし駱駝が通る針の穴

水月 りの（小熊座）

自粛する街並バラは惜しみなく

池田 紀子（小熊座）

山椒魚我が眼裏に棲みつきぬ

渡部 陽子（無所属）

籠もりゐて遠き桜はとほきまま

日下 節子（小熊座）

詩魂には自粛は無用天の川

高野ムツオ（小熊座）

ウイルスを春の稲妻祓ひ行く

野田青玲子（小熊座）

秋燕まだ括らるる鈴緒かな

黒河内玉枝（小熊座）

ホモ・サピエンス^{（にいはろにいはろ）}二〇二〇年のマスク

長岡 ゆう（滝）

〈順不同〉

表現と当事者性

小田島 渚
（銀漢、小熊座）

先の東日本大震災の震災句について、当事者性が議論に上がったが、コロナ禍においては全世界が当事者である。

葦汁やTVに世界地図真つ赤

成田 一子（滝）

毎日、外国のニュースが流れる。地球は丸く世界は一つと改めて思う。十月現在で日本の感染者は十万人を超えたが、二・六倍の人口でしかないアメリカでは、日本の九十倍の感染者数がでている。同じように日本もいつ急激に感染が拡大しはじめるかわからない。

詩魂には自粛は無用天の川

高野ムツオ（小熊座）

濡れそぼつあぢさゐ活けて家籠り

新藤 綾子（青岬）

ゴールデンウィークの移動を抑制するため、四月一六日に緊急事態宣言が全国に拡大され、家族にすら会えなくなった。句会などはオンライン化が一気に進み、世界中と簡単に交流できるようになったことは、今後新しい可能性を開いていくだろう。しかし、対面で人に会えないという不自由さがストレスを生み、知らないうちに心を軋ませている。

地球ごとマスクに覆う夏の夢

渡辺誠一郎（小熊座）

季節に関係なくマスクをする毎日となった。夏の夢に浮かぶその地球はマスクに覆われて息苦しそうである。夢と現が幾度も反転しながら、先の見えない不安は感染するように拡大していく。

未来図はすべて白紙に夏落葉

佐藤 成之（小熊座）

コロナ来てこの夏空の底抜ける

中村 考史（海原）

コロナ禍による失業者は世界中で激増している。日本では大手企業が来年の新卒採用を見合わせる方針を出した。就職氷河期に若者の採用縮小を放置した結果、失われた十年はあつたという間に三十年となり、日

本社会全体が弱体化した。転職を繰り返した果てに、十分な職業スキルを持っていないまま中高年を迎えざるを得ないかつての若者たちに、ただ自己責任という言葉を押しかけていて。白紙となった若者たちの未来には、優先的に具体的な対策が行われるべきであろう。

コロナ禍の世を真二つに黒揚羽 嶺岸さとし（海原・青岬）

コロナ禍で緊迫している世界が分断していく恐ろしさを暗喩しているようにも感じる。政治的な思惑だけでなく、人々の心の軋みや不安からくるわずかな判断の誤りが、戦争のような危機を誘発しかねない。

あらためて表現と当事者性を考える。三月、クラスター対策班の緊迫した現場がドキュメンタリー番組となつて報道されたとき、現実であるはずのこの現実が遠く感じられた。東日本大震災後、一週間も経たないうちに競うように様々な報道がなされたことを思い出す。被災地の、今まさに目の前にある現実がどこか物語として消費されていくような違和や抵抗を感じた方も少なくないだろう。しかし、表現における当事者とは被災の有無や多寡ではなく、表現しようと考えたその時から自身のこととなり、当事者性を持つと言えるのではないだろうか。

二百十日のドアノブを拭きに来る 庄子 紅子（牧・青岬）

梅雨冷や駅のベンチも一人おき 菊池 修市（青岬・牧）

検温で始まる講義文化の日 菊地 幸子（無所属）

テレワークの背を見守る金魚かな 倉基七三也（滝）

自身の日常に引きつけた句は消えやすい事柄の記録ともなる。一方で、なぜか平和的に感じてしまうのは、俳句が一点に集中するあまり、その他の大多数を捨象してしまう性質を持つからであろう。世界ではすでに百二十万人が死亡している。今後、失業などによる世界的な恐慌、場合によっては食料危機もありうる。時の経過からその集中する一点が厳しいものへと変貌していくかもしれない漠然とした恐ろしさが迫っている。

かはほりのこゑや第二波第三波 八島 敏（滝）

コロナ死は遺骨待つのみ花の雨 仙 とよえ（新俳句人連盟）

百年後、何が世界の役に立つかは誰にもわからない。ならば、言葉で、俳句で、今を生きる想いを遠い未来の私たちへ語りかけたい。

語れないコロナと語る無月かな 杉山 一朗（小熊座）

ようこそ、現俳へ。

令和2年度新会員紹介
(5月入会)

吉澤美香（小熊座）

秋風や畳に沿つて母の寝る

犬を待ち犬に待たれて薄紅葉

林檎切る指の先まで表裏

俳句入門のきっかけ

友達に誘われて、高校二年生の春に文芸部に入部した。文芸部では特に俳句に力を入れて活動しており、私は第十九回、第二十回俳句甲子園に出場した。高校一年生の時に友達が話してくれた俳句の面白さや魅力を、俳句甲子園や普段の文芸部の活動の中で身をもって実感し、高校卒業後も俳句を続けている。小熊座の句会を紹介していただいたのをきっかけに、二〇一九年から小熊座に所属している。

第34回現代俳句東北大会（☆令和2・9・27 青森）

（新型コロナウイルス対策の為、兼題のみ）

▽秀逸賞

阿弓流爲の眼光として夏の星

笹粽還らぬ子らのために結ぶ

高橋 彩子

日下 節子

渡辺誠一 著『俳句旅枕 みちの奥へ』（コールサック社）

想像力への信頼

成田 一子

（滝）

角川『俳句』に2017年から2019年にかけて連載されていた氏の「俳句旅枕」がこの度一冊の本になって手元に届いた。

東北各地の歌枕を実際に訪ねる紀行文のかたちをとるが、本書でとにかく驚かされるのは氏の豊かな知識と見識の深さである。俳人、歌人、詩人はもとより、小説家、思想家、医師、漫画家、暗黒舞踏家、はては映画監督、スポーツ選手に至るまで実に様々な人物が取り上げられる。読書は、一冊の本に触れることで次なる一冊に続く「芋蔓式」が楽しいが、本書はその「芋蔓」が一本ではなく、一冊から無数に伸びている感じである。ここで紹介されている八戸の「特異な思想家」安藤昌益や、津軽の方言詩人高木恭造など東北人らしい〈濃さ〉にあふれていて、彼らにまつわる著作にすぐにも触れてみたい衝動に駆られた。

〈現代版『おくの細道』〉とのコピーがふさわしいが、芭蕉のそれとの大きな違いは氏が東北に生まれ、今も東北に住んでいるということと、純然たる「旅人」でない点である。いわゆる「聖地」としてでない松島の側面——牡蠣や海苔の養殖といった生活の場である一面に芭蕉が触れなかったこと、また「芭蕉の頭の中には、古代東北の戦乱は存在しない。西行などの古人の詠った「壺の碑」の幻影のなかにいるだけ」（VI多賀城）ということばも、ここに生きる人のなまの実感なのだろう。スツと胸に響いてくる。

いわゆる「末の松山」「野田の玉川」「沖の石」といった歌枕に身近に暮らしている氏は「歌枕を前にした諷詠は、現実よりも、言葉の幻想の中に遊ぶほかはないのかもしれない」という。しかしこれは決して否定的な見解ではないのだと思う。氏は人間の「想像力」に絶大な信頼を寄せているように感じる。

「まわりを海に囲まれた島では、どの道を歩いても海に出る。その後は、海に出るのか、それとも自らの想像の力によって、さらに遠い世界へと飛翔する他にないのだ、島とはそのようなものだ」（VI塩竈——寒風沢島・桂島）。

「闇はまさに「妄想」を喚起する舞台装置そのものに他ならなかったように思う」（IV酒田——飛島）。

そもそも文学など明るところからは何も生まれない。飢饉や災害といった東北の歴史の上に今の私たちは生きている。私たちは本能的に「闇」を信頼している。そこからうまれる想像力も。

氏は旅先でその地にまつわる俳人らの文章を「書写」し「魂の交感」をするのだという。ホテルの一室にひろがる墨の香り。なんという豊かな時間だろう。本の終盤、福島原発事故に触れている部分がある。飛散した放射能の半減期は長いもので十万年に及ぶという。

「この時間の長さは我々が持っている言葉の射程を遥かに超えてしまったのではないかと思う」と氏は言う。

原発事故はいわゆる「人災」である。人間が「想像力」を駆使して、近い将来訪れるかもしれない悲劇にもっと敏感になつていけば、静かに墨をするような心持で冷静にこの世界を見つめていけば、防げたかもしれない出来事なのである。過去、現在、未来を自らの「想像力」によって見事にまとめあげた氏の一冊に触れて、そんなことを強く思った。

十年目の今、東日本大震災句集 わたしの一句

宮城県俳句協会では、東日本大震災の犠牲者を祈り、明日への一歩を刻む礎として、二〇一三年と二〇一六年に『東日本大震災句集 わたしの一句』を刊行することができました。
来年三月で東日本大震災より十年が経ちます。
この節目を俳句の力で掬いあげ、震災を風化させることなく未来へ伝える一冊となれと思います。
つきましては、左記により、震災から十年目の現在までを詠んだ俳句を募集いたします。被災や居住地を問わず、どなたでもふるって応募くださいますようお願い申し上げます。

●応募作品

大震災後十年を迎える今日までの自作一句から三句まで 既発表可
応募者は原則もれなく一句掲載します。

四六判ソフトカバー

※内容は自由ですが、趣旨にふさわしい俳句に限ります。

●応募方法

B5原稿用紙や便箋など一枚の用紙に左記内容を記入の上封書で応募ください。

①俳句三句以内

②大震災当時の居住地―市町村名（政令都市は市区名）

③氏名または俳号（ふりがな）、現在の年齢

④郵便番号、住所、電話番号

⑤句集の購入希望の有無を必ず明記（二冊以上の場合は希望の冊数）

※二句以上応募された場合は会長及び事務局が選を行います。

●応募料

無料。ただし、句集は一冊 一、〇〇〇円（送料共）で頒布

頒布希望者は、現金または定額小為替で、句とともに送ってください。

●お問合せ先など

E-mail: washinoiku@gmail.com

Twitter: [washinoiku](https://twitter.com/washinoiku)

インターネットの応募フォームからの

応募もできます。下記QRコードから。



●応募締切

令和二年十二月十五日（火）

〒九八九一三三五一

宮城県亘理町北新町二十二の十三 坂下遊馬方

「東日本大震災句集」係

電話 〇九〇一二九八二七三〇

主催 宮城県俳句協会

編集室から

■今地球上は、新型コロナウイルスの猛威にさらされている。世界の死者数も、この十月現在で一二〇万人に迫る勢い・終息の兆しは一向に見えない。今号ではこの状況を詠んだ作品を掲載した。呼びかけに、予想を上回り、会員の七割を超える参加があった。会員の皆さんの熱い思いが伝わってくる。コロナ禍にあっても、少なくとも俳人は、俳句を作ることにかけては健在である。

■このような状況について、石母田星人さんと小田島渚さんに筆を執っていただいた。小田島さんには会員の皆さんの俳句に読んでいた上で、論じていただいた。

■九月に予定していた青森での東北大会も中止を余儀なくされた。吟行会や研修句会の開催もままならないが、このような状況ゆえに、今しか詠めないもの、詠むべきもの、詠むスタイルがありそうである。少し遠くを見ながら気持ちだけは豊かでありたい。くれぐれもご自愛ください。



発行所 宮城県現代俳句協会
発行人 渡辺誠一郎
事務局 渡辺誠一郎

〒九八五一〇〇七二

塩竈市小松崎一一一九

渡辺誠一郎 方

電話 〇二二一三六七一一二六三